

「障害のあるひとがその人らしく地域で暮らすために」

宇治市地域自立支援協議会

1 提言をするに至った経過

宇治市地域自立支援協議会は、指定相談支援事業所があつまり構成されており、それぞれが相談支援のなかで向かい合った事例を検討してきました。

そのことから、本人の持っている障害が周囲に理解されないために、その人の行動が社会的規範とのズレとして映ってしまったり、利用できる社会資源がないために、必要な支援が受けられず地域での暮らしに大変な困難を抱える障害者がいるという実態、障害種別の谷間・空白の解消、市町村間の地域格差の是正という課題が明らかになりました。

障害者が生活している中で必要な社会資源を明らかにして支援をすすめていくために、今回の提言づくりに取り組みました。

本提言は、障害のある人がその人らしく、地域で暮らすために何が必要かをまとめたものです

2 明らかになったこと

- 宇治市では、障害種別や年齢によって、地域生活支援事業のうち移動支援および日中一時支援（児童・知的障害者を除く）の支援が受けられません。近隣市では、障害の種別による制限はありません。
- 障害者の家族への支援が十分ではありません。
- 不安感からパニックなどの不適応行動を起こしてしまっている事例があります。
- 生活上の些細なことに対応できず、ちょっとした支援が受けられず困っている事例があります。
- 重複障害者への専門的な支援体制が十分ではありません。

3 提言

《身近な地域での見守り・支え合いと相談支援機関の連携》

事例① 一緒に外出してくれる人がいないので、単身生活が不安定な方がおられます。

提言①

宇治市では、障害種別によっては近隣市で利用できている移動支援を利用できない方がいます。介助者や支援があれば、外出など日常生活も自由になり、精神的に安定して、地域で生活することができます。

事例② 症状に波があり、入退院を繰り返し、一人暮らしを始めたばかりの精神障害者で現在も頻回に訪問を必要としている方がおられます。

提言②

地域で生活するためには、安心できる支援者を拡げていくことが望まれます。移動支援でヘルパーと一緒に出かけることや、入院中・入所中から外出支援などの形でヘルパー利用が行えれば、新たな支援関係の構築に有効です。合わせて、症状に波のある方は、些細なことが生活破綻に繋がってしまいます。日常の些細な支援（電球の交換・リモコン操作などのちょっとした手助け）が臨機応変に行うことが可能なサービスや、さらには仲間同士の支えあい、近隣の見守りなどの充実を図ることが必要です。

事例③ 障害のある家族の状況に左右され、施設への通所が安定せず自宅から独りで外に出られなくなり困っている方がおられます。

提言③

家族による支援だけに依存せず、「個人の自立した生活」を実現するために、その人に関わる自立支援や介護保険、保育サービスなど個別的な制度やインフォーマルな社会資源を把握することが必要です。さらに、課題解決やサービス調整のために本人以外の家族への支援も含めて、取りまとめを行ってゆくといった横断した相談支援が可能になる新たな制度の枠組みと専門職を含めた人材の配置が必要です。

《集いの場所の確保》

事例④ 単身の精神障害者で、日中や夜間、休日にいつでも気軽に行ける場が無いとため、不安感が高まり、パニックを起こすなどして単身生活が不安定な方がおられます。

提言④

日中や夜間・休日に、本人の好みや目的に応じて使い分けができる居場所を、地域に一つでも多く作ってゆく必要があります。住民や関係者と取り組みをすすめ、公民館・地域の集会所などを活用する事業の展開を進めてゆくことや、地域活動支援など既存の福祉サービスを活用すると共に、宇治市でも他市町村と同様に日中一時支援利用者の拡大を図る必要があります。

《障害特性に配慮した支援》

事例⑤ 聴覚と他の障害の重複障害で、同じ障害を持つ人や支援者との人間関係がうまく作れず、心理的に不安定になっている人がおられます。

提言⑤

障害者支援の専門機関に、聴覚障害のコミュニケーション支援や、重複する障害に対して正しい支援ができるような、障害特性に配慮した専門職の配置と育成が必要です。

事例⑥ 交通事故による脳挫傷により高次脳機能障害になった人や、独居体験もしたが、家族以外の支援・援助が受けられず共同生活が行えない人がおられます。

提言⑥

障害サービス（施策を含む）は、個別的なニーズが高く、その特性に配慮したサービスが必要です。同時にそれぞれの障害に対する高い専門性を持った支援が必要です。こうした育成や支援を含む政策・施策を行う必要があります。

宇治市地域自立支援協議会はこれらの課題について、これからも向き合って取り組みを続けます